

(その3)

所 信 表 明 書

2026年 7月 31日

氏 名 片岡 寛章

立候補にあたり、簡単に自己紹介いたします。私は昭和57年に（旧）宮崎医科大学を卒業後、平成13年に医学部病理学講座の教授を拝命しました。平成16年には宮崎県地域結集型共同研究事業に参加する機会を頂き、産学官連携と異分野融合研究によって地域課題に立ち向かう経験を得ました。その後、教育担当副医学部長、附属病院副病院長、医学部長を経て、令和3年より宮崎大学理事・副学長として大学運営に携わっています。

これまでの経験から、宮崎大学の強固なポテンシャルと県民の宮崎大学に対する熱い期待を確信しています。以下、所信を書かせていただきます。

将来構想

次期学長は、第5期中期計画を立て、着実に実行することが求められます。人口減に伴う大学進学者数減少が一気に顕在化する2040年は第6期となりますが、2040年問題を見据えた改革を第5期にどれだけ実行できるかによって大学の命運は決します。そこでは学部定員数も聖域ではあり得ません。現学長のもと、各部局から選抜された若手教職員によって「宮崎大学未来 Vision for 2040」が改訂されました。本ビジョンを基盤としてこれまで推進してきた改革を確実に完遂するとともに、時代の大きな変動を乗り切るための果敢な変容を遂げ、創業的継承を実現します。いかなる改革を進める場合でも、その根底にある理念として、主体性を引き出す教育の実現、基礎研究力の強化と融合型研究の推進、深く丁寧な人材の活用、そして地域のステークホルダーとの協働意識を重視します。

私が目指す大学の姿は、地域社会・自治体と緊密に連携し、「人材が流出する地域」から「人材が循環する地域」へと転換するための課題解決において、人材育成力と研究力を基盤として主導的役割を果たす大学です。その過程で得た知見を全国へ還元すると共に、時流に過度に左右されない独創性に裏打ちされた研究や地域特性に立脚した研究の成果を、世界へ向けて継続的に発信する大学でありたい、と考えます。県内の小中高生にとって「真に必要であり、魅力ある大学」としての存在感を確立することが、本学の2040年問題対策においては必須です。

教育・研究・社会貢献・国際貢献

学生（留学生を含む）は大学にとって最も重要なステークホルダーであり、すべての学生に安心して伸びやかに学べるキャンパスを提供することは、学長としての最優先課題です。学生一人ひとりの視点や意見を受け止め、適切に応えることのできる大学、そして学生のメンタルヘルスに対して常に細やかな配慮を行き届かせる大学でありたいと考えます。

AIの普及とDXによって産業構造と働き方が急速に変化し、過剰な情報が溢れる社会では、時流に受動的に従うのではなく、状況に応じて自ら流れを創り出す力が求められます。その基盤は、主体的な学問的探究心、本質を捉える思考力、多様性を受容する複眼的視点であると考え、これらを育む教育体制の充実を目指します。文理融合型教育の重要性は今後さらに高まると確信しています。「地域活性化人材育成事業～SPARC～」での取り組みを着実に進めていくと共に、企業や社会人との錦本町ひなたキャンパスを活用した交流と学びの機会も積極的に学生に提供します。

地域に貢献する大学として、社会人を対象としたリカレント教育、リ・スキリング教育には、これまで以上に取り組めます。特に、実需に応じたり・スキリング教育は大学の収益にもつながることから、全学的体制を整備して対応したいと考えています。

研究活動は教育と並ぶ大学の根幹であり、真摯さと喜びをもって研究に向き合う教員の姿

勢は学生教育においても重要な要素です。

本学の研究ポテンシャル活性化には、テニュアトラック制度などを活用した優れた若手研究者の採用に加え、大学院生指導に関する教員経費および出版費用への支援強化が不可欠と考えます。財源確保のために外部資金獲得に戦略的に対応するURA組織を整備します。また、このたび採択された先端研究基盤刷新事業の推進により、技術職員の育成と高度化および共用研究機器の整備を着実に進めます。特に、本学の強みとして広く認識されている研究領域については、研究拠点化の実現にむけて戦略的に整備します。

教員の研究活動に関する詳細なデータベースは学外とのニーズ・シーズマッチングや、競争的資金獲得を目指して融合的な研究チームを機動的に構築するために必須であり、確実に整備を進めます。

宮崎大学には既に2つの融合型研究科（農学工学総合研究科、医学獣医学総合研究科）があり、また看護学研究科を改組して設置する健康科学研究科も医学部、教育学部、地域資源創成学部が協働する研究科となります。したがって分野融合的な教育研究の素地は出来ています。一方で工学部と医学部の連携研究をはじめ、既存研究科の枠内には収まらない先進的な学内共同研究が新たに数多く進展している現実もあります。より実情に沿った融合型博士後期課程を目指した改革を行います。

地域医療への貢献は本学のミッションの一つであり、「県内最後の砦」として医学部附属病院の機能強化は重要です。また、附属病院の財務状況は大学経営に重大な影響を及ぼします。私は病院長と緊密に連携し課題に対応してまいります。宮崎県は九州唯一の医師少数県であり、深刻な医師偏在も存在します。今後、医学科地域卒業者が着実に増加していくことから、彼らの卒後キャリア形成プログラムの円滑で効果的な運用が課題解決の鍵となります。それには宮崎県、県内医療機関、県医師会、医学部および附属病院が「ALL MIYAZAKI」として連携してキャリアパスをバックアップする体制が不可欠であり、私はその確立を支援していきます。

国際交流および留学生受け入れについては、現在の取り組みを継続しつつ、更なる発展を目指します。落ち込んでいる留学生受け入れ数の増加にむけた対策と、留学生を迎えるためのインフラ（学生寮等）の改善は、早急に対応すべき課題と認識しています。

大学運営

宮崎大学は地域に貢献し、地域から信頼される大学として、「世界を視野に 地域からはじめよう」をスローガンとしています。厳しい財務状況と文部科学省による運営交付金算定方法の動向を踏まえると、地域との緊密な連携を基盤として、大学のミッションに沿った戦略的施策を柔軟かつ機動的に展開する運営が求められます。

そのためには、学長のガバナンス強化によるスピード感のある自己変革能力は必須です。しかし、それだけでうまくいくとは思えません。ボトムアップはこれまで以上に重要で、各部局や教職員一人ひとりが大学全体の方向性を踏まえ、「正しいことをやろうとする」意識を共有することが何より求められます。そのためには、IR (Institutional Research) による大学運営に関わる客観的データの収集と、その全学的共有が肝要と考えます。IR組織とURA組織を学長直下の体制として強化・整備し、経営分析の高度化と運営資金の獲得増加による財務基盤の改善を図りたいと考えます。

他大学との連携においては、互いの強みを生かし合う協働を積極的に推進し、教育力・研究力の一層の強化に資する連携の構築を目指します。

全教職員が結束して宮崎大学の未来を共に創り上げる。そのような大学を実現するため、私は先頭に立ち、全力を尽くす所存です。

(注) 1. 用紙は、日本産業規格A4縦型とする。

2. 所信欄に、宮崎大学の将来構想、教育・研究・社会貢献・国際貢献、大学運営に関し、2000字程度で作成してください。

3. この所信表明書は、選考過程において公表されます。